

〈論文〉

## 日中古典詩歌における藤詠の変遷について

田中幹子・鄭寅瓏

はじめに

藤と言えば、『枕草子』の「木の花は」に「藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。」(新日本古典文学全集『枕草子』一九九七年)とあるように大振りの紫の房が垂れ下がっている豪華な花という印象がある。しかし、中国の人にとっては、藤は、野生的でしかも頼りないといった負の印象があるそうである。このイメージの差について、現在、神戸大学文学部国文科博士課程在学(二〇一七年度札幌大学非常勤講師)の鄭寅瓏氏との共同研究として日中古典詩歌の藤詠について論じることにした。

### 一 藤原氏の由来と生活の中の藤と葛

日本における藤の詩歌に大きな影響を与えたのは、藤原氏の存在であろう。源師頼の「春日山北の藤波咲きしより栄ゆべしとはかねて知りなき」(詞花集・雑・282)等、藤の花が藤原氏の繁栄であるという歌は数多い。藤原の姓は、大化の改新で功績のあった中臣鎌足が亡くなる前日天智八(六六九)年十月十五日に天智天皇に大織冠を授けられ、内大臣に任ぜられた時に賜った姓である(注1)。

『藤原家伝』では鎌足の誕生地を「藤原第」と記しており、「藤原」は、鎌足一族の邸の所在地があった所である。「藤原」の名は鎌足の生地である大和国高市郡藤原(のちの藤原京地帯、現 橿原市)に由来する(注2)。ここは明日香村大原のあたりの地名であり、「藤原」と「大原」は同じ地域である(注3)。『万葉集』の、天武天皇が鎌足の娘の五百重娘に贈った歌は「わが里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後」(巻2・103)と歌っている。また、橘守部の「万万葉集繪婦手」の中に引用された「多武峰廟記」では「往古、藤井と云う名水あり、清水の上に松柏覆いたるに大いなる藤這いかかりて、日の影を見ざりければ、水無月の望にも齒にしむばかりなりき。その藤の古株、鷺栖の社の傍に近年まで残りてあり」とあり、「藤原」は藤の大木に由来するという(注4)。

藤の花を詠むことが、藤原氏を詠むことになるという意識が定着する以前は、植物とし

での藤そのものを詠んでいた。特に古代では、藤は布の材料となる貴重な植物として身近な存在だった（注5）。藤蔓を繊維とした藤衣は縄文期を淵源とし、『万葉集』にも「大君の塩焼く海人の藤衣なれはすれどもいやめづらしも」（巻12・2971）とある。野に自生するつるを鉋で刈り、乾燥しない間に、木づちでたたきい表皮をはぎ、外側の鬼皮と内側の中皮に分け、木灰を入れた湯で中皮を四時間煮炊き、川にさらして竹製の器具で不純物をこし、天日で干し、割いて績み、指で丁寧による。その糸で織った衣は丈夫で七十年前まで仕事着として用いられていた。「藤衣」が粗末な衣のため忌むべきものとされ、喪に服す衣とされ、平安時代の麻の喪服も「藤衣」と称した（注6）。『万葉集』にも「錦」と対称的な布として詠まれている。天平十九年三月二日の大伴池主が家持に贈った歌の最後に「歌略」俗語云以藤績錦 聊擬談咲耳」（巻17・3967）と世間のことわざに「藤を以て錦に績（つ）ぐ」（藤蔓で織った粗末な布を、豪華な錦の布に縫い継ぐ）とは言う。

ところで、衣としての藤は古代では葛と混用されて表記されていた。その混同の様子は、現代でも見られる。「藤井寺」は近年まで「葛井寺」と表記され、「藤原京」を「葛原宮」と表記していた（注7）。「葛」はラテン語では「K a d z u r a」であり、「葛」を和名「くず」となったのは鈴木梅太郎氏によると奈良県国栖（くす）が葛粉の産地であったことに由来するとされる。植物学でいうならば、葛はマメ科多年生のつる草であり、藤はマメ科のつる性落葉樹であり、草と木という別物である。しかし『日本書紀』には「国栖がフジを食す」と記されている（注8）。現在、葛切で著名な吉野葛は、その原料を「葛葉藤（クズハフジ）」としている（注9）。橋口尚武氏には「昔、飢饉の時はフジの根を掘って採ってきて、それを槌でたたいて水を加え、沈殿したものをクズとして食用した」とあり、明らかに「葛」を「フジ」として表現している（注10）。また『古事記』中（兼永本訓）には「即ち其の母、布遅葛（フチカツラ）を取りて、一宿（ひとよ）の間に、衣、袴、及び襪（したうつ）沓を織縫ふ」とある（注11）。現在でも「葛」と「藤」は区別されるものではなかったと思われる。「葛」がその根を食す他にも、その蔓が「藤」とおなじく布の材料として重宝されてきた。古代の人々にとって蔓が生活を支える大切な素材であったため、「葛」と「藤」は混同されたのではないだろうか。

これは古代中国で既に見られたことであった。以下、中国古代、唐までの「藤」「葛」の文学での詠まれ方について鄭氏が担当する。

## 二 中国古代の藤と葛

中国では「藤（téng）」といえば、藤の花というより、つる性植物全体やそのつるをイメージする。木や壁に絡まって這い上がる特性があるため、中国詩の中では、「藤」には

軟弱、樹木に絡みつくとその木を枯らすというよくないイメージがあると従来指摘されている（注12）。しかし、「藤」が代表するつる性植物は、悪いものとしてばかりではなく、男女の恋愛や結婚の象徴としても詠まれていた。

管見の限り、「藤」を植物の名称として使った用例は六朝以前に見られない。『廣雅』では「藟，藤也」（注13）といい、「藤」を「藟」と同じものになっている。「藟」はつる草の総称やつるを指していて、『詩経』ではよく「葛」と並べて詠まれる。

「樛木」（『詩経』国風・周南）では、枝の曲がった木にかかる「葛藟」を興とし、夫婦の仲がとても親密である様子を詠っている。

南有樛木，葛藟纒之。樂只君子，福履綏之。

南有樛木，葛藟荒之。樂只君子，福履將之。

南有樛木，葛藟縈之。樂只君子，福履成之。

加納喜光氏（注14）はこの詩について

樛木に絡んでいく葛藟と、君子にかぶさっていく福履（女性が与える）とは、文体において対照的である。この手法は、自然と人間の両世界におけるメタファーの発見が前提となっている。すなわち、二つの絡み合う植物は、洋の東西を問わず、男女の愛の象徴となるのである。国風では特に葛が結合の象徴として常用されている。菟糸（ネナシカズラ）や女蘿（サルオガセ）なども象徴的な植物として後世の文学作品にもよく登場する。中国では、枝や幹を絡み合わせる二つの（または、二つが一つに合体している）植物は、後世「連理木」という名で呼ばれ、広い意味で和合・調和の象徴となっている。

と述べている。「葛」は当時の日常生活でよく使われる物であり、その蔓を刈り取って煮こんだら、布にすることができる。女性が服の製作にこなしたら結婚の準備ができたということを意味する。そのため、「葛」には男女の結びによって幸せな家庭が成立するというめでたいイメージもあり、家の繁栄を象徴する。

また、親族と離れ、異郷で流浪生活を送った人の心情を詠った「葛藟」（『詩経』国風・王風）では、

綿綿葛藟，在河之訃。終遠兄弟，謂他人父。謂他人父，亦莫我顧。

綿綿葛藟，在河之涘。終遠兄弟，謂他人母。謂他人母，亦莫我有。

綿綿葛藟，在河之澗。終遠兄弟，謂他人昆。謂他人昆，亦莫我聞。

とある。頼れる親や兄弟がいる人はまさに「綿綿葛藟（長くて茂っている葛）」のようで、水辺まで長く伸ばしてしまう。しかし、それと比べたら、自分は他人の家で居候し、だれも自分を家族の一員として思ってくれない。『毛詩正義』では、「『葛藟』，王族刺平王也。

周室道衰，弃其九族焉。（「葛藟」は王族が周平王を風刺するものであり，周平王は周王室が衰えた時に九族の親戚を切り捨てたのである。）」（注15）といい，周王室の庇護を失った貴族の作とする。ここでは頼りのある様を葛に喩えている。

六朝以前の詩では「葛」や「葛藟」が詠まれていたが，あくまでも蔓に注目しており，それをからみつくことで男女の結びつき，またつるが伸びていくことで繁榮と捉えていた。「藤」が植物として頻繁に詩の中に見られるようになったのは六朝の齊梁以後のことである。『爾雅』の郭璞注では「今江東呼蘂為藤，藤似葛而蘂大也。（今は江東（江南地域）で「蘂」のことを「藤」で呼び，「蘂」は「葛」と似ていて，太くて大きいのである）」（注16）という。「蘂」は「藟」の異体字であり，齊梁の頃に都が江南に移ったから，「藤」が使われるようになったのではないかと考えられる。矢嶋美都子氏（注17）は，

「藤」が詩の素材として注目され，丹藤，紫藤，寒藤，枯藤，垂藤，新藤，古藤，細藤，交藤，荒藤，野藤，石藤，横藤，臥藤，春藤等といった語に美しく開発されたのは，江南が文化の中心地となった齊梁の頃であるが，これは「藤」が六朝人の美意識にかなうものだったからに他ならない。

という。男女の結びを象徴するつる性植物は六朝の美意識のもとで，「藤」に成り変って新しいイメージが賦与されたということである。

六朝における「藤」の用例を見ると，「藤」は主に荒れ果てた所，仙境や春の景物として詠まれている。梁の何遜が亡くなった親友の範雲の旧宅通り過ぎた時に作った「行経範仆射故宅詩」では，

旅葵応蔓井，荒藤已上扉。  
寂寂空郊暮，無復車馬帰。  
激灑故池水，蒼茫落日暉。  
遺愛終何極，行路独沾衣。

といい，「藤」が扉に昇って行く姿は荒れ当てた風景を表現する景物として用いられる。範雲は生前尚書右仆射まで登り，齊梁の有名入であるが，死後はそのお宅が昔の繁榮から一変し，すっかり荒れ果てていた。それを見た何遜は昔自分の面倒を見てくれた範雲を偲び，その悲しさを風景描写に託した。

また，梁の庾信の遊仙詩ではよく「藤」を詠む。例として「婉婉藤倒垂，亭亭松直豎」（「遊山詩」）や「石紋如碎錦，藤苗似乱糸」（「奉和趙王遊仙詩」）などが挙げられる。矢嶋美都子氏（注18）は，庾信の遊仙詩における「藤」の詠み方についてこのように述べている。

遊仙詩の流れの中で庾信の遊仙詩に二首とも藤が配されてあるのは，極めて唐突であるが，歴代の遊仙詩の殆どが何らかの昇天の方法を提示している事と，「藤」の持つ「葛

藟」から連なる仙界へよじのぼる物というイメージ、更に「神おろし」の効用、そして「藤」が齊梁以降の仙味を帯びた作品の中ではかなりポピュラーな植物だった事等を考え合わせると、庾信の遊仙詩に配された「藤」は長い歴史を持つ遊仙詩の一つの集大成といえよう。

それらの遊仙詩の詠み方は「藤」に仙境（異郷）のイメージを賦与した。

さらに、僅かな用例しかないが、「藤」は春のイメージと結びつき始めた。梁簡文帝である蕭綱には「詠藤」という作がある。

緜條寄喬木，弱影掣風斜。

標春抽曉翠，出霧掛懸花。

「緜條」は春に新しく出てきた細いつるを指している。梁の庾肩吾の「細藤初上榦，新流漸涵積。」（「暮遊山水應令賦得積字」）や庾信の「新藤乱上格，春水漫吹沙。」（「奉和趙王美人春日詩」）でも、春を表現するために新しく出たつるを詠んでいる。梁簡文帝は「細くて弱い枝は高い木に寄りかかって、風に吹かれて揺らいたから、その影は弱弱しく見える。初春には青々としたつるが出て、霧が消えたら空中に花がぶら下がっている。」というように高い木を支えにする春の藤の姿を可愛らしく描いている。この発想は『詩経』の「樛木」にかかる「葛藟」の読み方から由来しているのではないと思われる。

六朝の「藤」の詠み方のもう一つの特徴は梁の蕭統の「丹藤繞垂幹，綠竹蔭清池。」（「和武帝遊鐘山大愛敬寺詩」）や齊の謝朓の「紅蓮搖弱荇，丹藤繞新竹。」（「出下館詩」）に見られるように、「藤」は「竹」と対に詠まれる。この習慣は唐にも受け継がれている（注19）。

### 三 日中における観賞用としての藤詠

唐になると、六朝のつるを読む「藤」の読み方を受け継ぐ一方、藤の花も頻繁に詩の対象とされるようになる。唐の時代から藤棚が庭に置かれるようになり、藤は山の中の雑草から身近に鑑賞する価値のある花になった。つるではなくて、藤の花の美しさを詠う漢詩が生まれ、「紫藤」「藤花」や「藤蘿」など藤の花を指す言葉が見えるようになった。例えば、盛唐李白の「紫藤掛雲木，花蔓宜陽春。」（「紫藤樹」）は高い木から垂れてきた紫色の藤の美しさを詠み、盛唐白居易の「夜深不語中庭立，月照藤花影上階。」（「宿楊家」）は庭の垂れてきた美しい藤の花が月に照らされて階段に投影された静かな場面を描いた。

そして、文人たちが遊びの時、藤の下で友人とともに花の美しさを味わいながら酒を飲む風雅な活動が流行っていた。中唐許渾の「紫藤」からはその様子が窺える。

綠蔓纒蔭紫袖低，客來留坐小堂西。

醉中掩瑟無人会，家近江南罨画溪。

許渾は自分の庭に藤を植えて、その藤は青々としたつるが木陰を作り、袖のような紫の花低く垂れていて、その時期に来たお客を小堂西で接待し、皆で酒を飲みながら、藤の花を堪能したと分かる。酒を飲みながら藤を鑑賞する例として、初唐の駱賓王の「野衣裁薜葉，山酒酌藤花。」（「夏日遊德州贈高四」）や晩唐の方幹の「坐牽蕉葉題詩句，醉觸藤花落酒杯。」（「題越州〈一有南郭〉袁秀才林亭」）なども見られる。

もちろん庭に植えた藤だけではなく、自然の藤の花も鑑賞されるようになり、水辺で垂れている藤や松にかかる藤が多く詠まれるようになった。水辺に垂れる藤の花の美しさを詠む例として、

藤花浪拂紫茸條，菰葉風翻綠剪刀。（盛唐・白居易「湖上閑望」）

遙聞碧潭上，春晚紫藤開。（中唐・李德裕「憶平泉雜詠憶新藤」）

などが挙げられる。水辺の木からぶら下がった紫の藤は緑の湖に投影し、風に吹かれると藤が波とあわせて揺らぐ景色を眺めながら、人々は思いにふける。松にかかる藤の例として挙げると、

水穿磐石透，藤系古松生。（盛唐・王維「春過賀遂員外藥園」）

藤長穿松蓋，花繁壓藥欄。（中唐・錢起「中書王舍人輞川旧居」）

などがあり、この詠み方は六朝の「高い木に掛かる藤」の詠み方を受け継いでいるのではないかと思われる。この詠み方は平安時代の読み方と共通するが、込められた意味は全く異なる。

一方、日本では観賞用としての藤詠は、既に『万葉集』が見られる。以下、田中が担当する。花に注目すれば『万葉集』においても「藤波の咲きゆく見ればほととぎす 鳴くべき時に近づきにけり（田辺福麻呂）」（巻18-4042）と藤の花は晩春から初夏、葛の花は「萩の花尾花葛花撫子が花女郎花また藤袴朝顔の花（山上憶良）」（巻8-1538）と秋の七草と詠まれ混同されることはない。植物を生活素材として見るのではなく、観賞用として見る文化が生まれると華やかな「藤波」として詠まれる「藤」、葉の裏が白いことから「秋風の吹き裏返す葛の葉のうらみてもなほうらめしかな」（平貞文『古今集』恋五-823）のように「恨み（裏見）」の花として詠まれる「葛」とまったく別物として詠まれる（注20）。

藤は『万葉集』では二十六首詠まれているが、そのほとんどが「我が宿の時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が笑まひを」（大伴家持巻8・1627）のように美しいものとして詠まれている。（藤衣を詠むのは巻3・413、巻12・2971のみ）藤を観賞目的のためにわざわざ移植していたことが山部赤人の「恋しければ形見にせむとわが屋戸に植えし藤波いま咲きにけり」（巻8・1471）からもわかる。「藤波の花は盛りになりにけり 奈良の都を



思はずや君（大伴四綱）」ように春風にゆれる藤の房を「藤波」と詠むのは中国には見られない美意識であり、藤の詠み方の典型となっていく。

また日本の藤詠のもう一つの特徴は、松とともに詠まれることにある。藤は蔓性なので、実際にはどの樹木でも巻きつくのだが、平安文学では、「水底の色さへ深き松が枝に千歳をかねて咲ける藤波」（後撰集・春・124）、「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」（拾遺集・夏・83）、などの和歌だけでなく『枕草子』の「めでたきもの」に「唐錦、飾り太刀一中略一色合ひよく花房長く咲きたる藤の花の松に掛かりたる」、『源氏物語』「野分」に明石姫の美しさを「松に藤の咲きかかる」と喩えるように、藤と松の組み合わせは常套表現になっていた。現実にも寝殿式庭園では中庭の松の木に藤が絡まされ、その美しさを賞美した。

この背景には藤が藤原氏の象徴であり、永遠性を意味する松と組み合わせることでその繁栄を寿ぐ意識があると思われる。例えば「藤波は君が千歳の松にこそかけて久しく見るべかりけれ」（金葉集・賀・326）では君の御代の千歳を約束している松を寿いだり、「春日山松にたのみをかくるかな藤のすゑ葉の数ならねども」（千載集・雑・右兵衛督藤原公行・1077）は、藤原氏の氏神の春日社の松に官位を頼んでいるという意であり、松の永続性に藤を伴って詠んでいる。松に這いかかる藤は慶賀の意を有し、藤原氏の繁栄を願って皇家と藤原氏が一心同体となっていることを松にかかる藤と表現していることが読み取れる。

#### 四 藤原氏の栄華の象徴

藤のイメージは藤原摂関政治への賛美と重なっている。そのイメージが定着するきっかけとなったのは、延喜二（九〇二）年三月二十日、穩子女御の兄左大臣時平によって飛香舎で開催された藤花宴である。この藤花宴は『源氏物語』の「河海抄」でも「花の宴」、藤の裏葉」の典拠としても指摘されている歴史上名高い催しである（注21）。この藤花宴は、滝川幸司氏によると、左大臣藤原時平による醍醐帝に対して献物という性格の宴であった（注22）。この宴は天曆三年（九四九）四月十二日の宴、応和元年（九六一）閏三月十一日の宴の先躰となった宴である。時平が「飛香舎の和歌」という歌題を献じ、醍醐帝自ら琴を弾き、時平は舞を舞い、太鼓を演奏し、帝は「かくてこそ見まくほしけれ万代をかけてにはへる藤波の花」（新古今集・春下・163）と詠んだ。この宴は、藤原氏が天皇家と君臣一体であることを世に知らしめた（注23）。醍醐帝は二十人ほどの女御・更衣との間に三十六人の子を設けたが、立太子となったのは穩子腹の皇子のみであった。穩子は、朱雀帝、村上帝の母となって藤原氏繁栄の基盤を作った后である。この藤花詠の際、天皇の養母である中宮温子から（注24）から藤の花を付けた銀籠二つが奉られた。

飛香舎は、初めは七殿に比べ格が低かったが、清涼殿の北西に隣り合った位置であることなどから、平安中期以降中宮や有力な女御の局になった。特に村上帝の後藤原安子が生涯おもに使用したのはこの局であったことが藤壺を藤原氏と強く結びつけた。安子は村上天皇となる成明親王の東宮時代に嫁し、藤壺で婚儀をおこない、藤壺を在所としつづけた。さらに一条帝后、道長の娘彰子も藤壺に住み、彰子の妹で三条天皇中宮の藤原妍子、もう一人の妹で後一条天皇中宮の藤原威子も藤壺に住んだ。長徳五（九九九）年、彰子が一条天皇に入内する際、藤原公任が詠んだ「紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらむ」（拾遺集・雑春・1069/『栄花物語』「輝く藤壺」）は「皇后の異名である紫の雲のような藤原氏の象徴である藤の花である彰子」という意であり、紫の藤の花は瑞雲の喩えであり、皇后としての将来を約束する象徴としての藤の歌である。この他、源師頼の「春日山北の藤波咲きしより栄ゆべしとはかねて知りなき」（詞花集・雑・282）等、雑部に入れられるように、純粹に藤を花として詠むのではなく藤原氏の繁栄であるという歌は数多い。藤が藤原氏の繁栄の象徴であるならば、逆に言えば、その繁栄によって圧迫される人にとって、藤は負のイメージともなる。その一つが『伊勢物語』「あやしき藤の花」である。

むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その花のなかに、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことはしらざりければ、すまひけれど、しひてよませければかくなむ、

咲く花の下にかくる人多みありしにまさる藤のかけかも

などかくしもよむ、といひければ、おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる、となむいひける。みな人、そしらずなりにけり業平は「藤原氏が栄える事を思って詠んだ」と答えている。これは藤の花が藤原氏であることが周知の事実となっていてこそその和歌であり、その歌で権力に追従する人々を揶揄していると読み取れる。さらにもっとはっきりと藤に藤原氏を託して、批判していると読み取れるのが、菅原道真の「紫藤」（『菅家文章』巻五 395）である。

高閣藤花次第開、疑看紫綏向風廻。

栄華得地長応賞、不放遊人任折来。

道真は、東宮（即位して醍醐天皇）の、一時に十首を作詩せよとの命を承け、その内の一首である。彼は、藤の花を栄花・権勢の象徴として詠んでいると思われる。しかし、「不



放遊人任折来」は他の人に折られないといい、藤原氏の独占政治を風刺する疑いがある。この発想の元になったのは、白居易の「紫藤」詩である。

藤花紫蒙茸，藤葉青扶疏。誰謂好顏色，而為害有余。下如蛇屈盤，上若繩縈紆。  
可憐中間樹，束縛成枯株。柔蔓不自勝，裊裊掛空虛。豈知纏樹木，千夫力不如。  
先柔後為害，有似諛佞徒。附著君權勢，君迷不肯誅。又如妖婦人，綢繆蠱其夫。  
奇邪壞人室，夫惑不能除。寄言邦與家，所慎在其初。毫末不早辨，滋蔓信難圖。  
願以藤為戒，銘之於座隅。

「附著君權勢，君迷不肯誅。又如妖婦人，綢繆蠱其夫。」という一句に、藤花を君主にくっ付けて、君主を惑す奸臣と夫を惑す邪悪な婦人に喩える。外見は綺麗でか弱いが、実はかかる木に非常に害を与えるという藤の像が作られている。この詩は諷諭詩であり、藤を用いて皇帝に佞臣に気をつけるべきだと諫言しており、『菅家文草』が影響を受けていると思われる（注25）。

唐では藤を擬人化する時のイメージについて鄭氏に以下まとめてもらう。

藤のイメージというと、まず思い浮かぶのは頼れるものがなければ綺麗に成長していくことができない、自主権のない弱いイメージである。盛唐の岑参「石上藤」には

石上生孤藤，弱蔓依石長。  
不逢高枝引，未得凌空上。  
何所堪托身，為君長万丈。

とあり、「孤藤」「弱蔓」という言葉でその寂しさと弱さが描いている。藤は何かに締めくくり、絡まって成長していく性格が擬人化されている。「不逢高枝引，未得凌空上」とは、推薦してくれる人がいなかったの、出世できなかったという。「何所堪托身，為君長万丈」とは、自分の身をどこに託せばいいだろう、託すところがあれば必ずその人のために才能を発揮するという意味である。この詩は藤を使って自分の不遇を嘆くものである。

また、盛唐の独孤及「和題藤架」には

人去藤花千里強，藤花无主為誰芳。  
相思歷乱何由尽，春日迢迢如線長。

とある。中では「藤花无主為誰芳」という一句は男が家から出た女を頼り主がない藤の花に喩え、心細さを表現している。

しかし、この弱くて心細いというイメージとともに先に紹介した白居易は「紫藤」のという詩では全く藤を宿る木に害する悪物とする。藤がとりかかった木を死なせる説話は『芸文類聚』「草部下・藤」に見られる（注26）。

『臨海異物志』曰、鐘藤，附樹作根，軟弱，須綠樹而作，藤既纏裹，樹便死，且有惡汁，

尤令速朽也。

『臨海異物志』によると、「鐘藤」という植物は木に絡めて根をくっつけ、自身が柔らかくて弱いので、木にくっつけて作らなければならなくて、一旦木を巻きつくと、木がなくなる。そして、毒汁を分泌するので、木に腐り痛むに最も有効である」という。このような説話により、唐までに藤が宿主に枯らすイメージができたのではないか。そして、白居易によって文学のテーマとなる。この詩以後、晩唐の杜荀鶴の「古樹藤纏殺」（「贈廬嶽隱者」）、晩唐の韓屋の「野藤纏殺鶴翹松」（「婦紫閣下」）などに見られるように、つるには宿る木を殺すモチーフができてしまい、また、晩唐の李山甫の「桃李傍他真是佞，藤蘿攀爾亦非群」（「松」）などに見られるように、中国では権勢のある人のちょうちん持ちをする人の喩えとして「藤」を用いるようになった。

しかし、日本文学が選んだ白楽天の詩は、「紫藤」詩ではなく、三月尽詩の中でよまれる晩春の「紫藤」であった。以下、日本に最も影響を与えた白楽天の三月尽の藤について田中がまとめる。

##### 五 日本が選んだ藤詩—三月尽の藤—

日本詩歌における藤詠の先行研究においてまず指摘されるのは白居易の「三月三十日題慈恩寺」である（注27）。

慈恩春色今朝盡，盡日裴回倚寺門。

惆悵春歸留不得，紫藤花下漸黃昏。

この詩の影響を受けた日本の和歌として紀貫之の「君にだにとはれでふれば藤の花たそがれ時もしらずぞ有りける」（後撰集・春下・139）や「君こずは年はくれにき立ちかへり春さへけふになりけるかな」（古今集・春・138・雅正）がある。しかしこの詩が和歌に多大な影響を与えたのは、『白氏文集』からというより、『和漢朗詠集』「藤」部に採られた故である。「惆悵春歸留不得，紫藤花下漸黃昏。（悵望す慈恩三月の尽きぬることを，紫藤の花落ちて鳥閑々たり）（和漢朗詠集・藤・123）行く春の象徴として美しい紫藤が詠まれているこの詩句は『千載佳句』にもとられておらず，公任自らがあえて選んだ詩句であることがうかがえる。『和漢朗詠集』と同時代の『源氏物語』の「藤裏葉」で夕霧が左大臣家の頭中将に娘雲居雁との婚姻を認める第一部の大団円を迎える場面で，この詩句が受容されている（注28）。

わが宿の藤の色濃きたそかれに尋ねやは来ぬ春の名残を

げに，いとおもしろき枝につけたまへり。待ちつけたまへるも，心ときめきせられて，かしこまりきこえたまふ。

なかなか折りやまどはむ藤の花たそかれ時のたどどしくは  
院政期以降の藤の和歌のほとんどは、「藤波の花の夕映えしをるなよあすより後の春のか  
たみに」（土御門院御集・140）や「行く春をうらむらさきの藤の花帰るたよりにそめやす  
つらむ」（拾遺愚草・重奉和早率百首・春・518）等、『和漢朗詠集』「藤」部を經由してこ  
の詩句に出会い、影響を受けている。

#### まとめ

古代において日中ともに「葛」と「藤」の区別はなかった。それは観賞する花ではなく、生活素材である蔓に関たれていたためである。日本では、奈良時代に藤の花を観賞するために移植されるようになり、平安時代、宮中や貴族の邸の庭園の観賞用になるにしたがって、藤の花の美しさを詠むようになっていった。やがて藤は藤原氏をたとえるものとなり、繁栄の象徴となる。対して中国では花を観賞する詩もあるが、概ね蔓に対する印象が他に寄りかかってしか生きられない弱いもの、しかも時には寄りかかった本体の木を枯らしてしまう害なすものという負のイメージがつきまとう。悪魔的な害なすものとしての詠まれている著名な詩が、白楽天の「紫藤」詩だったが、日本ではほとんどこの詩は受容せず、同じ白楽天の「三月尽詩」の行く春の象徴としての美しい紫藤の方を専ら受容した。日本のこの選択の背景には藤のイメージが藤原氏と結びついているためであったと思われる。害ものという白楽天を意図的に排除したと思われる。藤詠も純粹に花の美を賞美するのではなく、その紫色を瑞祥として詠み藤原氏に媚ているようなものが増えていく。中国では寄りかかり他を枯らすという負のイメージの蔓性の特性も、日本の場合、天皇家とともに君臣一体として繁栄するという藤原氏の存在と切り離せない。日本の藤詠は、賛美であれ、批判であれ、藤原氏を意識せずには特徴は語れないのである。藤原氏の繁栄の特徴は、己れが王になるのではなく、朝廷を支え、朝廷とともにあるという特殊な繁栄の仕方であった。この特異性が、蔓として巻き付くことを繁栄として捉える日本の藤詠の特徴を生み、日中の差異が生まれたのであろう。そこには民族性の違いまでも読み取れるように思う。

追記：本論文は、2017年度札幌大学個人研究助成金の成果である。

#### 【注】

- 注1 最初、藤原の姓は鎌足一代のものであり、後に遺族に藤原朝臣の姓が与えられたとする説もある。  
高島正人「藤原朝臣氏の成立」『奈良時代の藤原氏と朝政』吉川弘文館、一九九九年。

- 注2 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉共著『藤氏家伝 鎌足・貞慧・武智麻呂伝—注釈と研究』吉川弘文館、一九九九年。
- 注3 『明日香村史〈上巻〉』明日香村史刊行会、一九七四年。「大鏡」では、鎌足の誕生地を鹿島神宮のある常陸の鹿島にしているが、『藤氏家伝』や『大和志』では明日香村大原とする。(なお、「大和志」は江戸幕府による官選地誌「日本輿地通志」のうち刊行された「畿内部」(全六十一巻、五畿内志)と呼ばれる)の中、大和について記した巻十一から二十六巻をいう。著作には関祖衡、並河誠所ほか数人があたり、刊行は享保年間。)
- 注4 『万葉集叢書』(第三輯)臨川書店、一九七二年。
- 注5 別冊太陽『日本の自然布』平凡社、二〇〇四年。
- 注6 久保田淳・馬場あき子編集『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年。
- 注7 『藤井寺市史』第1巻 通史編一(考古・古代・中世)藤井寺市史編集委員会、一九八四年。
- 注8 『日本書紀』応神十九年。
- 注9 森野吉野葛本舗ホームページ『吉野葛について』[www.morino-kuzu.com/about1](http://www.morino-kuzu.com/about1)
- 注10 橋口尚武『食の民俗考古学(ものが語る歴史シリーズ)』第二部「陸の食」同成社二〇〇六年。
- 注11 『古訓古事記(中巻)』太安万侶撰、本居宣長説、長瀬真幸訓、永田文昌堂、一八七一年。青木和夫・石母田正校注『日本思想体系1.古事記』岩波書店、一九八二年。
- 注12 島田とよ子氏はすでに中国詩における藤のイメージについて検討し、指摘している。「明石中宮と藤の花—木高き木より咲きかかちて—」『源氏物語の探究 第十輯』源氏物語研究会編、風間書房、一九八五年十月。
- 注13 『廣雅疏證』王念孫撰、上海古籍出版社、一九八三年六月。
- 注14 『恋愛詩と動植物のシンボリズム』第二章 植物を詠み込む恋愛詩』加納喜光著、汲古書院、二〇〇六年三月、九三頁。
- 注15 『十三経注疏：附校勘記(毛詩正義)』阮元校刻、中華書局、一九八〇年十月。
- 注16 『爾雅：南北朝刊本』郭璞注、古典研究会叢書：別巻第一、古典研究会出版、汲古書院発売、一九七三年四月。
- 注17 矢嶋美都子「庚信の「遊仙詩」に表れた藤について：葛藟から紫藤へ」『亜細亜大学教養部紀要』二十一号、一九八〇年、一〇九～一三二頁。
- 注18 同注17。
- 注19 例として「傍岭竹參差、綠崖藤羃屨」(盛唐・慧宣「秋日遊東山寺尋殊曇二法師」)、「庖廚出深竹、印綬隔垂藤」(盛唐・王維「韋給事山居」)や「樹深藤老竹回環、石壁重重錦斑斑」(盛唐・白居易「題岐王旧山池石壁」)などが挙げられる。
- 注20 『歌枕歌ことば辞典』片桐洋一著、角川書店、一九八三年十二月
- 注21 玉上琢弥著『紫明抄・河海抄』角川書店、一九六八年。
- 注22 滝川幸司「延喜二年飛香舎藤花宴をめぐって」『天皇と文壇—平安前期の公的文学—』和泉書院、二〇〇七年三月、四一～五八頁。
- 注23 古藤真平「延喜二年三月の飛香舎藤花宴(日記の総合的研究)」『日本研究』四六、国際日本文化研究センター、二〇一二年九月、二四三～二六二頁。
- 注24 宇多天皇女御。関白藤原基経女。
- 注25 梁青「『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的表現」(名古屋大学博士学位論文、二〇一三年九月)の「第一節 藤原基経と紫藤詩」を参照。
- 注26 『芸文類聚』(唐)歐陽詢撰・汪紹楹校、上海古籍出版社、一九八二年一月。
- 注27 村中葉摘「正治初度百首」の定家の藤花詠における白詩「三月三十日題慈恩寺」撰取』『解釈(特集)中世・近世』九・十月号、二〇一六年九月、二五～三三頁。
- 注28 後藤幸良「源氏物語の「藤」と漢文学—白氏文集「紫藤」詩の周辺」仁平道明編『源氏物語と白氏文集』新典社、二〇一二年五月、一〇七～一三七頁。